# 神話・伝承事典

# The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets

## 失われた女神たちの復権

バーバラ・ウォーカー著

山下主一郎主幹

青木義孝　栗山啓一　塚野千晶

中名生登美子　山下主一郎

共訳

大修館書店

［訳者略歴］

**青木義孝**　1933年生まれ．1957年東京外国語大学英米科卒業．現在，福島大学教授．

**栗山啓一**　1944年生まれ．1976年東京大学文学部英米科博士課程修了．現在，中央大学助教授．

**塚野千晶**　1936年生まれ．1963年東京都立大学人文科学研究科修士課程修了（英文学専攻）．現在，日本女子大学教授．

**中名生登美子**　1932年生まれ．1954年東京大学文学部英文科卒業．

**山下主一郎**　1926年生まれ．1950年東京大学文学部英文科卒業．現在，中央大学教授．

**神話・伝承事典**
——失われた女神たちの復権——
© K. YAMASHITA, 1988

1988年7月1日　初版発行　　定価8,500円

訳者代表　山下主一郎
発行者　鈴木荘夫

発行所　株式会社　大修館書店
〒101　東京都千代田区神田錦町3-24
電話　03-294-2221（大代表）
振替　東京9-40504

印刷　壮光舎印刷　製本　三水舎　装丁　NDC 山崎登
ISBN 4-469-01220-3　Printed in Japan

# 神話・伝承のイメージを読む

本事典は Walker, Barbara G.: *The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets* (Harper & Row, 1983) を全訳したものである.

神話・伝承に関する書物を繙いたとき，語られている話の一応の理解には行き届いたとしても，ときには，その真意をはかりかねる場合がある．例えば，ギリシア神話で，懐妊している妻メティスを呑みこんだゼウスが，やがてメティスの腹にあった子アテナを頭から生み出した，という話，また，オイディプスが自分の母親であり，王妃である者と近親相姦的な結婚をした話など，いったい何を物語っているのか，一読しただけでは理解に苦しむ話であろう．そして，キリスト教神話においても，「油を塗られた者」を意味するキリスト Christ という語が，なぜイエスを飾る称号となったのか，また，新約聖書においては，聖母マリアの記述がイエスに比較してあれほど少ないにもかかわらず，なぜ後世，聖母崇拝があのように熱烈なものになったのか，それらは処女降誕と同様，不可解なことに思われるであろう．また更に，伝承されている話，例えば，魔女がほうきの柄にまたがって集会の場に飛んでいくという話や，アリババが「開け，ゴマ」の呪文を唱えると，不思議や洞穴の扉がひとりでに開くという話，そして昔よく映画で見た場面であるが，花婿が花嫁を家に連れいくとき，抱き上げて入れてやる話……伝承にも不可解な話は挙げれば切りがないであろう．

こうした不可解な話については，もちろん，それぞれの専門書を丹念に拾って読んでいけば，明解な解答は得られる．諸説があるにしても，一応の納得が行く．しかし，神話・伝承に対する解明がほぼ包括的にまとめられた書物は少ないのではなかろうか．本事典は，その意味で，なかなか得がたい書物と言えよう．

もちろん，著者が本事典を著わしたのは，そうした謎解きの事典を編む趣旨からのみではない．通読すればわかるように，著者の姿勢には一貫しているものがある．結論的に言えば，「ギリシア神話の研究は，ずっとむかしバッハオーフェンやブリッフォールトが主張したように，家父長制を奉ずる部族たちが東や北から侵入してくるまえにヨーロッパに成立していた

女家長制，およびトーテム制度を理解することからはじめなければならない」，とする姿勢に共通するものであろう．引用したのはR.グレーヴズの『ギリシア神話』（高杉一郎訳）にある言葉である．著者はとくに，女家長制，すなわち母権制社会から父権制社会への移行ということをつねに頭に置いて本事典を編んでいった．それは『序』の中でも著者自身がはっきり述べていることからも明らかである．著者がそうした姿勢を取ったのは，研究のひとつの道筋であったからであるが，同時に，1960年代に全世界的に起こった反体制運動の，とくに婦人解放運動からきていることは明瞭である．解放の神学というより，解放運動そのものの一環からであろう．アメリカのそうした書物は，他にも日本に翻訳紹介されてはいるが，事典という形で詳細綿密に語られているものは類例がないと思われる．

ユダヤ・キリスト教的伝統が，父なる神である男性神を崇拝する以上，その歴史観は男性側からの歴史となっていることは明らかである．そのため，女性側から歴史を見直した場合，従来の父権的歴史観の中に隠蔽されてしまっている秘事があらわになることは当然であろう．本事典が，男性側から強要されている文化的偏見に対して，「秘事」を専ら明らかにしているのはやむをえないことと思われる．原題に『秘事』とあるのはそのためなのである．

著者は1930年，フィラデルフィアに生まれ，ペンシルベニア大学を卒業．新聞記者として活躍後，結婚．本書以外に次のような著書がある．

*The Secrets of Tarot: Origins, History, and Symbolism* (1984)
*The Crone: Woman of Age, Wisdlom, and Power* (1985)
*The I Ching of the Goddess* (1986)
*The Skeptical Feminist: Discovering the Virgin, Mother, and Crone* (1987)
*The Woman's Encyclopedia of Symbolism* (1988)

本事典の訳出分担個所は次の通りである．

| | |
|---|---|
| 山下主一郎 | A → Dymphna, Saint |
| 塚野千秋 | Eagle → Grace, Manu → Melaina |
| 青木義孝 | Graeae → Mantra |
| 中名生登美子 | Melchizedek → Serpent, Tarot, Ursula, Saint → Vampire |
| 栗山啓一 | Seshat → Tara, Tartarus → Urine, Vanir → Zurvan |

なお訳出にあたっては，訳語の統一をはじめ，種々の協議を重ねたが，



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なお不統一の個所があるかもしれないし，いちばん苦渋した固有名詞の片仮名表記の不備や専門用語訳の不徹底も見られるかもしれない．識者の御教示を願う次第である．

最後に，本書の翻訳を奨めて下さり，図版の選定，作成まで御面倒をおかけした大修館書店の志村英雄氏に厚く感謝する次第です．

1988 年 6 月

訳者一同

# 序

アダムは，なぜ，イヴを「生んだ」のか．⇨ Birth-giving, Male の項を参照．

「聖三位一体」とは，本来は誰を指していたのか．⇨ Trinity の項を参照．

中指は，どのようにして，男根のシンボルになったのか．⇨ Fingers の項を参照．

鏡を割ると，なぜ，不吉なのか．⇨ Mirror の項を参照．

「復活祭のウサギ」は，本来は何だったのか．⇨ Easter の項を参照．

イエスは，なぜ，イチジクの木を呪ったのか．⇨ Fig の項を参照．

人々は，なぜ，ヤドリギの下でキスをするのか．⇨ Mistletoe の項を参照．

ルシフェルの天界からの落下には，どのような意味が込められていたのか．⇨ Lucifer の項を参照．

イエスの墓に出かけて行ったのは，なぜ，女たちだけだったのか．⇨ Mary Magdalene の項を参照．

マホメットの娘は，なぜ，自分の父親の母と呼ばれたのか．⇨ Fatima の項を参照．

ローマは，なぜ，没落したのか．⇨ Dark Age の項を参照．

聖ペテロは，実在の人物だったのか．⇨ Peter Saint の項を参照．

女性たちは，なぜ，教会の中で頭にかぶりものを着けるようにと言われたのか．⇨ Hair の項を参照．

初期のキリスト教徒は，なぜ，結婚を不法とみなしたのか．⇨ Marriage の項を参照．

アーサー王は，なぜ，幼児たちを殺そうとしたのか．⇨ Innocents, Slaughter of の項を参照．

女教皇は，実際にいたのか．⇨ Joan, Pope の項を参照．

Fairy tales（おとぎ話）とは，本来はどのような意味だったのか．⇨ Fairies の項を参照．

本書には，周知の幻想や，秘密の事実が数多く収められ，しかも，詳細に解説されている．また，「女性差別」という複雑な主題も，歴史的・神話的視点から取り上げられている．定評のある百科事典でも，普通この種の主題は，項目から外されるか，あるいは，簡単で不分明な記述しか与えられていない．しかし，西洋文明においては，まず女性中心（「女神」崇拝）の宗教があって，それが男性中心（「神」崇拝）の宗教へと移行したのであり，したがって，この移行については，そのさまざまな側面にわたって十分な研究を行なう必要がある．

西洋の文化には，男性は「神」God の姿に似せて作られたという観念が深く浸透している．この観念は，「神」と男性の創造の順序が逆だったという可能性，すなわち，「神」は男性が自分の姿を投影して作り出したものであるという可能性が大きいにもかかわらず，今もなお信じられている．既知の宗教は，過去のものであれ現在のものであれ，全く性別のない中性の神を確立することができなかった．常に，女神あるいは男神が崇拝され，折に触れて，男女一対の神，または，男女一対の神を象徴する両性具有神が崇拝された．しかし，いずれにしても，神々は人間と同じように性別を備えていた．同性愛を容認する文化を持っていた人々，たとえば古代ギリシア人などは，当然，同性愛の関係にある神々を崇拝した．⇨ Hermes.

現代のキリスト教徒は，「父と子（息子）」の姿は聖なるものとして崇めるのが当然と考えているが，それと対応関係にある「母と娘」の姿には，古代人とは違って，神性を認めていない．カトリック教徒は，今日でも，「神の母」，「天の女王」，「聖母」など，古代異教の「女神」Goddess の称号の一部を用いて，いわば女神崇拝を行なっている．しかし，カトリック系の神学者たちは，聖母マリアが，新しい衣装を身にまとった，昔の「女神」にほかならないと認めることを拒んでおり，しかも，一般のマリア崇拝を考えればつじつまが合わないのだが，聖母マリアは神性を持っていないと主張している．⇨ Mary.

昔，キリスト教以前には，「三相一体の女神」が信奉され，三相一体の女神は，「処女」・「母親」・「老婆」の姿で顕現して，創造・誕生・死という循環のすべての過程を支配していると考えられていた．しかし，キリスト教徒は，この女神の神殿，聖典，儀式，信者たちに攻撃を加え，「三相一体の女神」という観念を破壊してしまった．教会側は，当初から，「全アジア，いや全世界が拝んでいる」太女神は軽蔑されるべきであり，その「ご威光」は「消えて」しまわなければならないと宣言していた（『使徒行伝』19：27）．2000 年にも及ぶ教会の歴史の中で，教会が逸脱と矛盾を犯すことなく信奉し続けてきた福音書の教義は，事実上これだけだったのである．キリスト教としては，自らが，中東の「女神」崇拝から派生し，ペルシアやイ

ンドの禁欲主義によって方向を変えられた宗教であるという事実を，伏せておく必要があったものと思われる．⇨ Jesus Christ.

救済を唱える宗派として，初期キリスト教は，その贖罪の仕組みの基本を，女性は悪しき者であるという前提の上に置いた．「堕罪」があったために救済が必要とされ，しかも堕罪は，女性たちの元型に相当する原初の「女性」（イヴ）によって引き起こされた．「神」の意志に公然と反抗したというイヴの神話がなかったならば，原罪は存在しなかったであろうし，したがって，救済や救世主も必要なかったであろう．⇨ Eve. 教会の教父たちは，原罪は，性行為による妊娠と出産を通じて，未来永劫，女性たちの手で次代へ伝えられていくと主張した．女性の持っている神秘的・悪魔的な性的魅力が，男性を「悪欲」に誘い込み，この「悪欲」は，合法的な結婚の場合でも，罪の穢れをすべての子孫に伝えると言われた．⇨ Sex. これが，聖アウグスティヌスの主張であり，教会はこの見解を決して改めようとしなかった．

これまでの歴史を見ると，キリスト教の聖職者たちは，一貫して婦女虐待を支持しているが，これは，女性の性的能力に対して聖職者たちが抱いていた恐怖心とか，原罪によって人間に永罰（地獄落ち）をもたらしたのだから，女性はすべて罰を受けて当然であるという聖職者たちの信念を，具体的に表わしたものだった．男性を代表するアダムは，女性を代表するイヴよりも罪が軽かった．聖パウロにいたっては，罪を犯したのはイヴだけと考えていた（『テモテへの第一の手紙』2：14）．この伝統は20世紀になっても続いており，この場合聖職者たちは，婦女虐待を積極的に行なうようにとは言わなかったかもしれないが，しかし，少なくとも，自分から進んで婦女虐待をやめさせようとはしなかった．聖職者の中には，常習的に自分の妻を殴打する者もいた．また，大方の聖職者たちは，今でも女性に対して，「神の御意志」に従って男性に服従しなさいと助言している．⇨ Sexism.

男性や「神」は女性たちに攻撃を加えたが，しかし通常の場合，この攻撃が女性たちの実際の悪行に対する報復であると正当化することは不可能だった．したがって，初期キリスト教の神学体系にとっては，神話の中に「堕罪」という女性の悪行を設定することが不可欠だったのである．実生活で意図されていた目標は，女性が男性に害を与えぬようにするということではなく，女性が男性から独立して行動するのを不可能にすること，すなわち，女性が自分の財産を所有したり，自分で金銭を稼いだり，配偶者を自分で選んだり，誰にも邪魔されずに子供を育てたりするのを禁止することにあった．

父権的宗教は，異教社会に戦いを挑んだ．異教社会では，母系親族だけ

が重要な親族関係と考えられており，女性たちが土地を所有して耕作を管理し，男女の結びつき（結婚や離婚）も女性の側の自由裁量にゆだねられていた．⇨ Matrilineal Inheritance. 生物学的見地からすると，父権的宗教は，人間以外の哺乳動物の雌たちが持っていた自然権，すなわち，生殖力旺盛な雄を選ぶ権利，交尾の際の諸条件を決定する権利，自分の巣を持ってその巣を支配する権利，子育てという重要な仕事に専念しているときはすべての雄を拒むことができる権利などを，人間の女性には認めようとしなかった．⇨ Motherhood.

このように，父権制の人間社会では，女性に備わっている基本的な生物学的諸権利さえも否定されていたのである．歴史の曙の時代には，そうでなかった．その頃は，男性を生み出す者として母親の社会的役割は，今日とは全く別様に理解されており，ある意味では，現代の父権的思想と相容れないものだった．⇨ Kingship. 今日の学者たちの間では，この古代世界の男女の神々を一括して呼ぶ場合，ちょうど人間を一括して man と呼ぶのと同様に，gods という語を使うのがしきたりになっている．しかし，当時の（母権的）世界では，最高位の神は通常は「女神」Goddess であって，この「女神」は，すべての男神を生み出す者，すなわち，男神たちの「母」だった．また，原初の言語においては，*man* という語は「女性」を意味し，女性は，神々の母に相当する「月母神」を体現していた．⇨ Man.

初期キリスト教の思想家たちは，女性たちが信奉している「女神」を滅ぼしてしまえば，女性たちの誇りと自信に決定的な打撃を与えることになるだろうと考えた．この考えにはもっともなところがあった．なぜなら，男性は，「神」God の姿は，一段と優れているという違いはあっても，自分たちの姿と同形であると考えていて，そのことが，男性の誇りを支える大きな力になっていたからである．男性は「神」から霊魂を授けられたが，女性の方はこの「神」の娘と呼ばれることがなかった．6 世紀には，教会側の人々は，女性が霊魂を持っていることさえ否定した．

ヨーロッパの女性たちは，キリスト教を信奉する征服者から「女神」崇拝を表に出すことを禁止され，結局は無理やりに，男たちの信仰を受入れさせられた．女性たちは，ときには，男性側の見せかけの譲歩に釣られてしまった（これらの譲歩は，のちに撤回されたのである）．⇨ Convent. 女たちはまた，キリスト教に改宗した夫，あるいは大君主から圧力をかけられた．古代の女性たちが信奉していた，母権的宗教にまつわる神話や秘事は，半異教的なアイルランド諸教会に置かれていたシーラ・ナ・ギグの像が，男たちの手で地中に埋められたのと同様に，2 度と見つからないようにという願いを込めて葬られてしまった．⇨ Sheila-Na-Gig.

しかし，キリスト教系の歴史のほとんどが認めまいとしていることなの

だが，1000年以上にもわたって，あるときは暴力が行使され，あるときは策略が弄されたにもかかわらず，西洋世界は，完全にはキリスト教化されなかったのである．古代の信仰（「女神」崇拝）は，根絶されることがなかった．なぜなら，両親のうちで重要なのは父親だけという神学者たちの主張にもかかわらず，すべての人間はやはり女性から生まれ，女性によって養育されていたからである．⇨ Paganism. 父親だけが重要という考えは，言葉だけの空疎な観念に留まり，人間が幼児期に頼りにしているのは母親であるという実体験にそぐわなかった．父性愛は現実生活の場に現われたとしても，母性愛に比べて不十分であり，母性愛の不自然な模倣にすぎないと思われた．⇨ Fatherhood. 父親と子供たちの関係では，愛よりも恐怖の方が優勢だった．父親たちは，教会の説教壇の上から，厳罰によって子供らに「神への畏れ」を教え込むよう命じられていたのである．

厳罰の中でもとくに厳しかったのが，「天の神」から加えられる罰であり，この罰に対する男性たちの恐怖心から，永遠の苦しみ（地獄）という恐るべき幻想が生まれた．キリスト教の「地獄」は，事実でないものを事実と見せかけるための最もサディスティック（加虐的）な幻想だった．⇨ Hell. 教会側としては，無知な会衆を脅して服従させるためだけでなく，魔女に対する拷問と火刑を容認するためにも，地獄の観念を用いた．異端審問官たちは，魔女などの異端者に対する永遠の処罰は，現世から開始され，犠牲者が死ぬまで続けられなければならないと言った．⇨ Inquisition.

「女神」やその息子と愛人たち（すなわち，古代の男神たち）を信奉する宗教は，悪魔崇拝と呼ばれるようになった．なぜなら，古代の男女の神々は，（架空の聖人としてキリスト教の聖人名簿に載せられなかった場合），改めて「悪魔」と規定されたからである．父権制信奉者の間では，「女」と「悪魔」は関係があり，その関係は，「エデンの園」の物語以来のものであると考えられていた．⇨ Serpent. 世界が啓蒙の時代を迎え，組織的迫害が行なわれなくなっても，この考えは消えずに残った．拷問や火刑はなくなったが，しかし18世紀や19世紀には，女性を法的・政治的・経済的・心理的に抑圧することを目的とした，一段と巧妙な悪弊が出現した．聖職者たちは，女子教育に反対したり，女性を「相応の身分」に留めておくための，身体的・法律的な措置を支持して，この悪弊を助長した．ハーマン・ボンディ卿がいみじくも述べたように，男性たちは，「西洋の3大宗教の中に秘められている陳腐で露骨な女性蔑視」の主要な源として，また，「いまだに猛威を振るっている残酷で非人間的で破壊的な女性差別の根拠」として，「神」を用いたのだった．女性たちが，自分には何の価値もないと感じたり，不安感を抱いたり，更には，マゾヒズム・鬱病などの精神異常に陥るのは，男性中心の宗教のもとで行なわれている女性の本性と相容れない



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

教育に，かなりの原因があるものと思われる．

最近になって，女性たちの一部には，西洋社会で支配的な男性的イメージや価値観に埋れている女性の本性を，更によく理解しようという動きが生まれている．この新たな研究からは，１つの興味ある観念が明らかになろうとしており，それは，もしも女性の宗教（古代における母権的宗教）が中断されずに続いていたとすれば，今日の世界は，これほどまでに暴力や疎外に悩まされることがなかったかもしれないというものである．父神たちは，ヤハウェをはじめとして，信者らに戦いを命ずる傾向があった．それに対して，大いなる母神たちは，文化的技術を平和裏に進歩させることを唱えた．搾取でなく協力が，母権制の原則だったのである．⇨ War.

「女神」崇拝とは，通常，性愛・誕生・死という自然の循環を率直に受け入れ，しかも，母親として子孫の幸福を願うことを意味していた．愛は，いわゆる「神の愛」が行き着いたような抽象的原理ではなく，「女神」崇拝の過程で，じかに，親密に，しかも，具体的に経験できるものだった．⇨ Karuna. キリスト教の怒りを招いた西洋中世の「異端」の中には，この種の東洋的な「女神」崇拝の観念が，明らかに残存していた．⇨ Romance.

いかなる宗教であれ，宗教の中で最も重要な要素は，対人関係（人間相互の関係）の行動様式を規定している部分と言えよう．古代において「女神」を崇拝していた女性たちは，どのような行動様式を育て上げようとしていたのか，このことについての綿密な研究が今日の有意義な課題であることは確実である」．「女神」の聖典の１つが的確に指摘しているように，「互いに憎しみ合い傷つけ合う人々が，霊魂について立派なことを口にしたところで，いったい何の役に立つというのか．……宗教とは，思いやり（慈愛）である」．⇨ Atheism.

今日でも，「思いやり豊かな女神」の痕跡は，考古学者，東洋学者，その他の学者たちが改めて発見した貴重な資料はもとより，そのほかにも，神話，迷信，おとぎ話，民謡，民俗舞踊，伝承童謡，伝統的な遊戯や祝日，魔法のシンボル，サガ（北欧伝説），各種の聖典（初版，改訂版，外典を含む）など，歴史や風習に関する，数多くの，目立たないささやかな領域の中に見出すことができる．比較研究の結果，いろいろな模様が現われており，それらの模様は，ジグソー・パズル（切抜きはめ絵）の断片と同じで，互いにぴったりとはめ合わすことが可能である．「女神」崇拝についてのはめ絵パズルは，まだまだ完成からほど遠いが，しかし，かなりの数のはめ絵の断片が本書の中に収録されている．

本書に収められている「神話」や「秘事」は，異教から取り入れられたものだけではない．聖書に載っている神話は，とくに重要である．それは，聖書に述べられている神話が，西洋文化の物の見方を形づくっているとい

うだけでなく，母権制から父権制への移行期の，ちようどその何世紀かの間に，書き下ろされ書き替えられたものだからである．キリスト教神話のその後の展開は，女性差別の観念を確立するのに大いに役立った．ヨーロッパにおける女性差別は，キリスト教の主要な産物だったのである．ユダヤ教，キリスト教といった父権的宗教は，主として精緻な虚偽の体系によって，「男性の世界」を創造し維持した．本書に収められている「秘事」の中には，教会が文字による記録を独占し，自分に都合のよい歴史だけを書いてきた1500年の間に，覆い隠され，ごまかされ，あるいは，偽造された，歴史上の驚くべき秘事が数多く含まれている．

キリスト教の歴史が隠してきた事実の一部は，ここ数十年の間に，明るみに出されてきている．残りの都分は，今もなお父権制の維持に専念している宗教的な諸団体によって，秘密のままに伏せられている．非聖職者，とりわけ女性たちは，建て前から言えば，それらの秘密を詮索することを禁じられている．しかし，隠された事実を発見することは，不可能ではない．

キリスト教的立場から書かれた歴史の最深部に隠されてきた秘事は，当然のことながら，数多くの名前を持った「女神」，すなわち，キリスト教以前の考え方によれば，世界を創造して支配し，「救世主たち」を生み，予言者たちに聖なる律法の書板を授け，子宮から墓場までの万人の生を見守ってくれた，あの「三相一体の女神」（原初の聖三位一体）だったのである．三相一体の女神は，今日では「神話的」存在とみなされ，その属性のほとんどを継承した「神」にその地位を奪われてしまっている．（「神」にしても，同様の神話的存在だったが，しかし，男性優位の文化にあっては，「神」の方が受け入れられ易かった．）まだ一般には理解されていないのだが，西洋の男性ならびに女性の精神生活，とりわけ女性たちの精神生活は，暴力的手段による「女神」抑圧の結果，きわめて内容の貧しいものになってしまったのである．

現代の男女同権論者たちが人類の秘められた歴史と呼んでいるものの大半は，「女神」の信者に対する教会側の絶え間ない戦いに関するものである．キリスト教は，自らが古代世界で広く信奉されていた「女神」の宗教から生まれたにもかかわらず，いわば母親殺しの息子となり，しかも，偏狭な信念を抱いていたために，その思考と感情のすべてが女性に対する憎しみに染まっていた．キリスト教は，最終的には，一方の性が他方の性を常に抑圧し，しかも，この不公平は「造物主」（すなわち，「神」）によって定められた自然の状態であると両性が受け取っている，そのような社会を作り上げた．しかし，キリスト教以前の世界では，事態は全く逆であって，「造物主」に相当する存在は，通常，「女造物主」（すなわち，「女神」）だっ

たのである．自分の姿に似せて「神」を作り出す過程で，男性たちは，昔は女性が自分の姿に似せて「女神」を作ったという事実をほとんど忘れてしまっている．「神」よりも前に「女神」が崇められていたということ，これが，すべての神話の奥底に隠されている秘事であり，同時に，本書が明らかにしようとしている根本的秘事なのである．

バーバラ・G・ウォーカー

# 日本の読者へ

最近の学術的な発見によると，西洋および東洋の文明の源は，これまで知られていなかった女性中心の，女神崇拝文化の伝統にあることがわかってきた．その文化は，旧石器時代や新石器時代において，世界的に栄えた文化であった．今日のわれわれがよく知っている父権的な社会や宗教が発展したのは，人類の全歴史にくらべれば，ほんのごく最近のことにすぎない．

かっては平和をこよなく愛し，青少年をやさしく教育し，平等で，そしていつも母親的意識のなかにあった文化が，戦争を好み，暴力的で，階級色の濃い，父親的意識の強い文化へと全世界が変わっていったことは，考古学，人類学，古生物学，比較宗教学の研究から見て明白なことである．そして，神話が新しく解釈し直されると，宗教の元になったさまざまな考えは，世界のいたるところで，みなよく似た同じものであったことがわかってきた．その上，世界がもっと思いやりのある世界に将来なるにはどうすればよいかも，その新しい解釈から示唆されるところが大である．古代の人々の考えが本来どういうものであったかを思えば，われわれは，人間同士，あるいは自然といかにすれば調和ある生活を送ることができるかに気がつくはずである．

母神が支配していたと思われる古代においては，戦争や戦争が作り出した集団増悪などは，全くまれなことであった．主神が母神であった時代，人々はすべて，互に血のつながりを覚えていたのである．

現代の哲学者のなかには，今日人類に唯一希望があるとすれば，それは，以上のような古代のイメージを再び甦らせる道を見つけることである，と信じている人もいる．迷信を盲目的に信じることではなく，人間の心のなかに隠れている集団的無意識のうちで，効果的で有意義な部分を見つけ出し，不自然な，あるいは愚かな部分を取り除くことである．政府が他国民を憎悪するように説くことは愚かなことである．不幸なことに，こういったことは，男性主導の社会や父神たちの特長であった．これは，男性が生殖に一役買っていることがわかったときからのことであった．そして，この新しい情報が悪用されて，人間は互に憎み合うようになったのである．

他国の文化にある神話や宗教的な考えを学ぶことはとてもためになることである．学ぶことによって，われわれの神話に新しい光を投げかけることになるからである．神話の嘘も真実もわかるのである．神話を学ぶことは，われわれ自身を新しく学ぶことになるのである．

本書は西洋の宗教的伝統を，以上のうような意味で概観してきたが，日本の読者がその意を汲み取られることを期待します．本当に，西洋のも，また他のすべての宗教的伝統も，その源はわれわれ人間の集団的精神のなかにあるのであって，しかもその精神はこの地上のすべての国々において全く同じものなのである．

1988年6月

バーバラ・G・ウォーカー

Barbara Walker

# 凡　例

1　＊印は，その印がついている英語が，本書の中に見出し語として載っていることを表わし，そのため，その項目を参照されたし，の意味である．例えば「女神マートMaat*」とあれば，見出し語 Maat の項目を見ると，より詳しい知識が得られることになる．

2　見出し語の次に丸括孤があって他の語が紹介されている場合があるが，それは見出し語の他に括孤内の語もあることを示す．

3　⇨印は，見出し語としてあるから，その項目を参照されたし，の意味である．

4　典拠は文中に1，2，3……の数字で示し，項目の最後に注として挙げてある．ただし注は略記されている．完全な形は本書の「参考文献」を見られたし．なお，注の中でイタリック表記されているのは，書名の場合である．

5　片仮名表記や訳語の後に英語が記載されている個所があるが，読者の理解の便をはかったためである．また，英語表記がイタリック体になっているのは，原語が英語表記になっていることを表わす．

6　†印は文中に注記があることを示すものである．

7　ハイフンで2語（句）が結ばれている場合は，その両者の関係が非常に密であることを表わす．例えば，イシス-ネフティスの場合は，この2女神が姉妹であり，しかも2人で生と死を表わす聖なる女神を構成していることから，2人の関係が切っても切れぬ関係にあるためにハイフンで結ばれているのである．また，男根-目とある場合，目は男根を婉曲に表現する語として用いられているために，ハイフンで結ばれるのである．

8　聖書訳は日本聖書協会訳（旧訳）に依った．



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com